

王 凱歌が拘置所に送られて数ヶ月が過ぎた・・・

紅龍はいつもながらお客が入らず暇な日々を送っていた。

～紅龍～

ガラガラ・・・「ごめんください。」市江が入ってくる。

「あら～すっかり元気になったじゃない！術後の経過はいいですか？」美智が問う。

「はい、おかげさまで。来週退院になるので、皆様にご挨拶をと・・・

お世話していただいてありがとうございます。」市江が深々と頭を下げる。

「いいのよぉ！でもほんとに元気になってよかったわ～」 “ピロリロリン♪臨時ニュースです”

「あら、何かしら。また物騒なことでもあったのかしら」美智と市江がＴＶを見つめる。

“国際的に有名なＳＦＮ（セフナ）貿易会社の組織内の何者かが輸入品にまぎれてライフル、麻薬などを密輸したという連絡がありました。容疑者は１人しか逮捕できておらず、まだ日本内に１００名ほどの仲間がいると予想されています。

後のニュースが入り次第おってお伝えいたします。”

「この事件・・・きなこが追っている事件だったんじゃない？」

～国際二課～

「あ～逃げられたー！！」きなこが怒る。「１００人も逃がしてしまうとは」船木が頭を抱えている。

「すいません船木課長。あいつら・・・女に銃を乱射して！当たらなかったからよかったけど、取り逃がしてしまいましたね。」結局、２人は結婚せず、ただの仕事仲間に戻ってしまった。

「しかしＳＦＮか・・・１２１１に続く巨大な敵になりそうだな。」船木がきなこの方を見る。

「円道寺くん？」 「・・・あっ、ほんと厄介な敵が増えましたよっ。」

～１２１１アジト～

「ボス、ＳＦＮの者達がやってまいりました。」

「中に入れてやれ。」部下をにらみながらコーは言った。

ＳＦＮの１人が大きな荷物と一緒に入ってくる。

「こんにちは、１２１１のボス。あなた方からはずいぶんお世話になっています。

約束どうり金になる麻薬・・・そしてライフルを持ってまいりました。」

一つ一つ中のものを確認する部下。

「あの～ちゃんと４分の１お金は渡してもらえるでしょうね？」ＳＦＮが言った。

「今後とも私たちに協力するなら・・・な。」コーは口がにやけた感じで言った。

「わかりました。今後ともよろしくお願いします。」そう言って部屋から出て行った。

「ボス、あいつらこき使ってやりましょうよ！」

「当たり前だ。ＳＦＮに１２１１はいくら金を回していると思うか？相当な額だぞ。

ＳＦＮの人数は１００名ほどいるからな。何か面白いことでもやってやるか・・・」

またコーはにやけた。

～拘置所～

ただ風のように感じるときの流れに凱歌は不安を感じていた。

『また1211が大きいことをやっているのだろうか…』そのときふと、勇気が生まれた。

「おい!なんだ用ってのは」監視員が凱歌の元へやってきた。

“ボフッ”

凱歌はひたすら走って逃げた。そのころ建物中は大騒ぎになっていた。

凱歌が塀を乗り越えたとき、中年の男性とぶつかりそうになった。

何とかぶつからずに着地した凱歌はまた走り出そうとした。だが、

「王…凱歌だな。」

振り返り、

「何で僕の名前を知っているのですか!？」突然のことでびっくりした。

「私かね？私は君の望むことを叶える者だ。」

「!？」何を言っているのかさっぱりわからない凱歌。

「さあこれを…この使い方は君次第だ。使い方で君の未来は明るい、暗黒か。

考えて使いなさい。」服と大きいアタッシュケースを渡された凱歌。

ケースを開けてみる凱歌「これは…!」

～横浜コスモワールド～

「さあ今日は遊ぶわよぉ～!!」大はしゃぎのきなこ。

「お姉ちゃん!いい年こいて大人気ない…」

「俺はここに来なくなっちゃっていいだろ?」と、雁太郎

『きなことったらホイさんもいなくなったし船木さんとも別れちゃったしきつと寂しいのよ。』

美智がはなと雁太郎に耳うちする。

「ねえあれに乗ろうよみんな!水の中にドッパーンとおちるコースター」

コースターのほうへ指を指すきなこ。「じ、じゃ乗ろうか!」

はながきなこと一緒に乗り場へ向かう。…その時!

パーンッ!!どこからか銃声が聞こえた。なんとコスモワールド内からだった。

さっきまでお客や従業員しかいなかったのに、物陰から武装した人が何人も出てきた。

「騒ぐんじゃねえぞお、てめえら。おいっ1箇所に集まれ!

入り口やらあちこちに爆弾を仕掛けてやったからな。騒いだら…

そいつから消してやるぞ!」犯人の一人が言った。

仕方なく円道寺家の人々も中心に集まる。ほかの客も騒がないように息を殺して集まってきた。

「集まったか。ようし、お前らは人質だ。これから身代金をたっぷりもらってやるからな…!!」

笑いながら言い放った。そのとき、きなこの隣にいる女性の様子がおかしいのに気がついた。

「どうされたんですか?」小声で聞いてみた。「私の…娘がいないんです」はと思った瞬間。

「おかあさああん;」泣きながら物影から出てきた。

「くっ、うるせえなガキが。」無理やり女の子の腕をつかんで引き寄せた。

「まずはこのお譲ちゃんからだ。」女の子の頭に銃を突きつける。

『なんてことを…!』きなこは正義感からとっさに犯人に飛びかかろうとした。

カチャッ きなこの目の前に銃口を向けた。これにはきなこも引くしかなかった。
「バイバイ。おじょうちゃん。」銃口を向けなおそうとした。次の瞬間！

パーン！！…カラカラカラ 銃が犯人の手から落ちた。「誰だ銃を撃ったのは！！」
その先には同じ犯人グループの一人が立っていた。
彼は素早くほかの銃を持った人を倒していき、走って逃げていった。
犯人グループは覆面をしていてお互いの顔はあまりわからないようになっていた。
「やつを追え！裏切り者め！！」その前に立ちふさがるきなこ
「銃を持っていないならこっちのもんよ」
あっけなくきなこにやられた犯人グループは警察によって御用となった。
「お姉ちゃん、仲間割れしてて意外とあほだったね！アイツら」「うん…」

～国際二課～

翌日、ある話題でここはもちきりだった。
「おはようございまーす。」
「きなこちゃんたいへんだよ～；」
「へ？何ですか大変って…」
「昨日、王 凱歌が拘置所から脱走したそうなんだ」
「課長！あの話本当ですか？」船木に詰め寄るきなこ。
「ああ、みんな全力で搜索しているよ。」「なら、私たちも…！！」
「いや、僕たちは違う仕事がある。」「何ですか違う仕事って！」
「１２１１とSFNの関係がわかったんだよ。
あいつら１２１１から多額の資金援助を受けて、その金で麻薬を輸入していたらしい。
そのほとんどが１２１１に流れていっているんだ。」
「だから…仕事って？」「１２１１のアジトがわかったんだ！」

～１２１１アジト～

「ボス、外が騒がしくなってきました。サツですかね？」
「ああたぶんそうだ。SFNのやからが喋ってしまったんだろう。準備は整っているんだろうな？」
「はい。ボス」静かに部屋から出る部下。

アジトに着く国際課の面々

「ここがアジト…古びたビルね…」
「さぁ準備はいいか！いくぞ。」でもなぜかきなこを先頭に。
じゃ私から行くわよ！と言って入るきなこ
“ドーン！！”何かが爆発する音がした。
きなこが振り向くと入り口が爆発で崩れて戻れないようになってしまった。
「ちょ…課長—！！」叫んでも向こうからの反応はない。
蹴っても蹴ってもがれきの山はびくともしなかった。
『先に進むしかなさそうね』そう思ったきなこは、どんどん足を進めていく。

その先には広く5階くらいの高さの吹き抜けになっていた。

「どうやら1階には1211のやつらはいないようね」階段のほうにかけていくと、バシュン！ きなこの足元に銃が打ち込まれた。びっくりしたきなこはうしろへ後ずさりした。さっきまでいなかった1211+S F Nの連中がきなこを囲む。

「警察が来たときはびっくりしたが、入り口をふさげばしばらくは入ってこれないからな。おまえは1人、こっちは5人 さぁどうする？」

きなこを囲み、構える1211+S F N 「…やってやろうじゃないの！」

(1211+S F N v s きなこのアクション たぶんスゴすぎ)

5人の攻撃をかわしていたきなこだったが、スキをつかれて腹に蹴りをくらってしまう。

「くっ…」その場にしゃがみこむきなこ ふと階段のほうに目をやるとライフルをこちらに向けて構えているS F Nの1人がいた。

「フン、残念だったなこっちにはほかに1人隠れていたやつがいたんだよ！殺っちまいな！」

『もうだめだ…！』と思った次の瞬間、

バシュン、バシュン、バシュン、バシュン、バシュン！！

一瞬、銃声がしたと思ったらきなこの周りにいた5人は皆、その場に倒れた。

撃ったのは階段のところにライフルを構えていたS F Nの者だった。

その男性はライフルを置き、降りてきた。倒れたうちの1人がよろよろと起き上がり

「お前…仲間を撃ちやがって！いったい何者だ。そのサングラスと帽子を取りやがれ！」

そういうと男性に勢いよく飛びかかってきたが、男性に軽々と投げ飛ばされ気を失ってしまった。

その様子を見ていたきなこはその男性に「あなたは誰なんですか？」と聞いた。

すると、それに答えて帽子とサングラスを取った。そしてきなこの方に振り返った。

「…！？」

まさしくその男性は 王 凱歌だった。

「ホイさん…！ どうして？」きなこは突然のことであわてた感じで言った。

「いろいろあって…」下を向いて言う凱歌。

(回想シーン)

「これは…！」ケースの中には拳銃1丁とライフルが入っていた。

「これでお前の未来を変えてこい！！お前になら1211を潰すことができるだろう。」そう言い、来た道を帰ろうとする中年の男性。とっさに凱歌は、

「あなたの名前は！」すると、ゆっくりとふり返り「佐伯だ。じゃあな」とだけ言って帰ったのだった。

(シーン終わり)

「佐伯…？」何かを知っているように言うきなこ

「知っているのか？」

「ううん、よく聞く名前だよ。知ってる人でも2、3人くらいいるし。」

そう言うときなこはゆっくり立ち上がった。

「さっ!ボスを倒しにいこっ!」

「ボスはおそらく地下だ。さっき奥のほうに地下への階段があった。」

(階段をかけ下りる2人)

地下についた2人。きなこがボスのいる部屋のドアを蹴破る。

「何?この部屋は・・・!」その部屋は天井が高くダンボールが山のように積まれていた。

ダンボールの影からスッと人が現れた。

「よお、凱歌ちゃん。」 コー村木・その人だった。

「今日こそ1211を潰してやる・・・!!」凱歌がにらみながら言い放った。

「ふんっ、兄にそんな態度をとるのか?」その言葉に驚く凱歌。

「えっ? コー村木とホイさんが兄弟?」きなこも驚いた。

「しょうがない、教えてやろう。」

(お話)

俺は母と、王 凱歌の死んだ親父との間に生まれた。

そのころよりだいぶ前から母はそこらじゅうの男と遊んでいたらしい。

子供が大嫌いな母は俺を生まれてすぐ捨てやがった。

もちろん男とも別れ、母も行方をくらませた。

だが、別れた親父は‘市江’という女と結婚した。その子供が凱歌、お前だった。

つまり、オレとお前は腹違いの兄弟ってわけだ。

「うそだ!!」

「信じるかどうかはお前しただよ。さあ、ボスとの対決を始めようか。」

(すばらしいアクションシーン)

凱歌&きなこ v s コー 両者、一步も引かず。

「ホイさん・・・アイツつよい!」

「いや、誰でもスキが生じる。そのスキがあれば-。」

(またアクションシーン きなこがコーにけりを入れられて、

吹っ飛び、気絶してしまう。)

「きなこさん!」

(アクションシーン コーにおされぎみになる)

「もう終わりだな、凱歌ちゃ・・・」ポフッ 鈍い音がした。かろうじて意識があったきなこがけりをコーに入れたのだった。

「ぐぁっ!!!」そのスキに凱歌が腹に1発けりを入れた。きれいな1発であった。

「さぁ!もう終わりだコー村木!!」そう言うとコーは不気味な笑みを浮かべた。

「ふふ、お前らココにいているビールール・このビルのあちらこちらにも置いてあるが、こいつがなんだかわかるか?」

「何!？」 その時コーはポケットからライターを取り出し火をつけた。

「正解は・・・これだよ」ライターを段ボール箱へ投げる。すると、

ドオオオオオン！！！！

ものすごい爆風と炎にコーはあっという間に飲み込まれた。

「ダンボールには火薬が詰まっていたのかっ！」

だが、そのものすごい爆風と熱気にきなここと凱歌は飛ばされて壁にぶち当たってしまい気を失った。

「うっ…き、きなこさん！」ようやく目を覚ました凱歌はきなこを急いで起こした。

「ホイさん、どうしっ…熱い!!」

もうすでに2人の周りにはものすごい炎に包まれていたのだった。

「とにかくここの部屋から出ないと！」凱歌がきなこの手をひく。

走って階段を上る2人

このびる自体が火薬の倉庫らしく、火が上のほうまで上り爆発がひっきりなしに起こっている。

なので、落ちてくる瓦礫をよけながら走らなければならなかった。

あたりを見渡しても出口が1つも見つからない。

だが2人はかすかに感じる風の方向へ行く。と、そこには…

「出口だ…。」

2人がその出口に向かって走り出す。

ドオオオオンツツツ！！

また爆発が起きた。だがさっきの爆発より比べものにならないくらい大きな爆発だった。

ものすごい音と砂煙 - とっさに目を覆うきなこ

「きなこさんっ、あぶない!!」

きなこを突き飛ばす凱歌

その轟音がおさまり目を開くと…

「ホイさん!？」

目の前に広がっていたのは全壊したビルだった…

ビルがもろくも崩れ去り、ホイさんの姿も見えなくなっていた。

そこに国際二課のメンバーとショベルカーなどがやってくる。

「無事だったのか!円道寺くん！」

きなこのもとにかけよる船木 まだ瓦礫の山を呆然と見つめるきなこ

「さっきから爆発の音がして…かなり心配していたんだぞ! それで1 2 1 1は…?」

「ボス…コー村木は倒しました。でもホイさんがあの瓦礫の中にまだ…!」

「なんだって! おいっ、すぐ作業に入るんだ!」周りの人々に指示をする船木

「ホイさんはっ？ホイさん助かるんですか!」

「何しろこの瓦礫の量じゃ…もしかしたら最悪の場合も…」うつむく船木

「…!!」その言葉にきなこはその場に座り込んでしまう。

翌日…

—紅龍—

「行ってきます。」元気がないきなこが、いつも通り出かけていく

「あのこ…昨日のことがよっぽどショックなのね。」心配する美智

「だって…ホイさんが…」下を向くはな

雁太郎はその様子を見て…

「お前たち何にもわかってないなあ!」

「なによおどういう意味なの?」

「あのな、昨日の船木さんからの電話では“瓦礫の中を全部調べたがいませんでした”っていつていたんだぞ?ということはその場から脱出したとしか考えられないだろう?そうだろ」

「あっそうか! そうだよな。」はなは雁太郎の言葉に安心した。

「あいつは必ずこの家に帰ってくる…いつかな」

—国際二課—

「ちょっと…円道寺くん?」船木がきなこのデスクにやってきた。

「何ですか課長。」

船木の隣にはもう一人誰かが立っていた。

「この人は香港警察に勤めている佐伯勇治さんという人でね、君の力をぜひ香港の犯罪撲滅のために役立てたいと考えているそうだ。」

「どうも、佐伯ですよろしく。」

「知ってます!佐伯さんは拳法の達人だそうで…」ちょっとうきうきするきなこ

「私は君の力をぜひ香港警察のほうで役に立てたいと思っているんだ。1211は消えたが、まだまだ闇の組織はたくさんある。君とあの人の力があれば消滅させることもできるかもしれない。ぜひ香港警察のほうに来てくれないか円道寺くん…」

「あの人って?」

「君より先に香港警察に来ている人がいるんだよ。円道寺くんの協力者だ。ぜひ香港に…」

頭を下げる佐伯

「あっ…そんな、私でよければ世界中のどこにだって飛んで行きますよ。」

「そうですか、それはありがたいでは来週、出発できるように準備をしてくれないか。

わたしが迎えに行きますから。」

そういつて帰っていった

「たのむよ円道寺君。」肩にぼんと手を乗せる船木

「はいっ、がんばります。」

- 1週間後 紅龍 -

「じゃあ、いってきます」

大きな荷物を持ったきなこは、家族、船木に見送られて出発するところだった。

「君がいなくなると、国際二課がさびしくなるな。」

「お前が向こうに行っちまうと、ビール飲み仲間がいなくなっちまうだろうが。」

「もうっ…はいはい、じゃあね。」佐伯の車に乗り込むきなこ

佐伯の車が出発する

「そういえば…あのこと円道寺君に言いました?」

雁太郎にたずねる船木

「いってないよ。そうしたほうがあいつ…びっくりするからなあ～」

ニコツとしながら船木のほうを向く

「そうですね」

(あっという間に香港警察に到着)

—香港警察—

刑事課にやっと到着したのだが中には誰もいない

「この部屋は年中こんな感じだよ。」

「そうなんですか・・・」驚くきなこ

「あの…もうここに着いてる人がいるって前におっしゃっていたじゃないですか。

その人はどういう人なんですか?」

「君に引けをとらないすばらしい運動神経の持ち主だよ」と佐伯はこたえた

「多分、今日はここにずっといると言っていたが…おーい円道寺君をつれてきたぞ!」

そうする奥のほうの扉が開いて、スーツを着た男性がこちらに向かって歩いてきた。

その人を見てきなこはびっくりした。その男性は…

「今日から円道寺君と協力してくれる 王 凱歌だ。」

「よろしく…。」

「何でホイさんが!? どうして…」

「そこにいる佐伯さんが僕にいろいろしてくれた…ビルからは間一髪出ることができたんだ。」

「連絡してくれればいいのに…もう、心配したんだからね!!」

「ごめん、言いづらくて…」

「それより…ホイさんのスーツ姿って…なんかヘン(笑)」

「…悪かったな…」

2人は戦い続けるだろう…この世に悪がある限り…

— E N D —